

---

# Hana

ayu

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

H a n a

### 【Nコード】

N 7 1 0 9 V

### 【作者名】

a y u

### 【あらすじ】

退屈な毎日に飽きて自分から近づいた。  
私はなめていた。  
本当の愛を。  
本当の罰を。  
本当の悲しみを。  
踏み越えてはいけない一線を私は越えた。

## 罰

今年の夏は夜も暑い。

それなのにクーラーをつけずに寝たせいで暑すぎて夜中に目が覚めた。

全身汗でびっしょり。

ダルい体を起してシャワーを浴びた。

「・・・ひどい顔・・・」

鏡に映った自分の頬はコケて目の下のクマも気持ち悪いほどはつきりあった。

こんな顔だから彼は離れたのだ。

もっと芸能人みたいに可愛ければ彼は私を選んでくれたに違いない。  
こんなぶさいくな顔だから。

他の人に可愛いといわれようが、告白されようが彼でなければ意味がない。

キャンドルの入れ物を鏡になげつけた。

だけど鏡は割れなくて代わりに入れ物が割れてガラスが飛び散った。

足のいたるところから血が滲む。

ただ痛みはなかった。

血が滲んでる太ももを見て自分が生きてることを実感する。

私は前を進む勇気もなく、だからって死ぬ勇気もなかった。

まだ認められないのだ。

自分が負けたことが。

彼に捨てられたことが。

本当は気づいてないふりをしているだけかもしれない。

ガラスを片付けた。

指から血が出るのも気にせず片付けたら涙が出てきたけど泣いたら認めなくてはいけなから我慢した。

部屋に戻ると空はもう少し明るい。

また意味のない一日が始まる。

この部屋には思い出が多すぎる。

いたるところに彼がいた証が残っているから。

耐えきれずに外に出た。

財布も携帯も何も持たずに出て、適当に歩き続けた。

視界に海が入る。

意識はしなくても私は知らない間に海に向かっていたみたい。

別に海が好きじゃなけじゃない。

むしろ嫌い。

暑いし肌が焼けるし潮臭いし。

でも彼が好きだった。

だから私にもここに住むように進めてきたんだ。

外に出ても彼の思い出がありすぎる。

私はこんなに苦しんでいるけど彼は違っただろう。

今頃隣りに奥さんが寝ているんだろう。

不倫がいけないことは分かっていた。

むしろ彼と出会う前は自分の気持ちをコントロールできず、  
不倫するなんて最低でバカなだけだと思ってた。

だけどいざ自分がその立場になるともう想いが止まらなくて  
彼の左手の薬指が光るほど好きになっていった。

イケない事をしているという罪悪感さえもが快感に感じてしまう。  
そして彼の思ってもいない約束を信じてしまうのだ。

それでもよかった。

彼に奥さんがいようと彼の都合でしか会えなくても  
私の家でしか会えなくても周りに何言われようと  
彼さえいればよかったし、私にとって彼が全てで  
彼こそが私の生きる理由だった。

だけど私は捨てられた。

それはそれはあっさり。

彼はゲームをリセットするかのように私を簡単に捨てた。

泣いてすがろうとしたけれど、そういう女を彼が一番嫌いなことを

分かっていたから

我慢した。私は最後まで彼の気が変わることを願っていたのだ。

でもダメだった。

「アドレスも電話番号も変えるからもう連絡取れないから。」  
写真もなく、彼の会社も何も知らない私にはもう彼との思い出は  
自分の記憶と想いだけだった。

ひどい男だと思った。

こんな男居なくても生きていける。

私ならもつといい人を見つけれれる。

何回も何回も言い聞かせた。

だけど無理なんだ。

だって私はどこまでも冷たく私を絶対に中にいれてくれない彼に惹  
かれていたのだから。

だから最後まで彼は私にとって完璧な人だった。

そのせいで私は今も苦しんでいる。

そしてまだ馬鹿みたいに期待して泣かずに一人で待っている。

私は彼の望む女でしょう？

だから戻ってきて。

もしかしたら彼が戻ってくるかもしれない。

だから死なない。

まあ死ぬ勇気なんて持ち合わせてないだけかもしれないけど。

彼がいなくなつて昨日で三か月。

私は後どれくらい待てば彼は戻ってくるんだろう？

朝日が眩しくて目を閉じる。

目を開けて彼が目の前にいたらいいのに。

そんな馬鹿なことを考えながら目を開けた。

.

## 溺

目を開けた。

もちろん彼はいないけれど。

ずっと海を見てると自分が人魚のように海の中に入っても呼吸ができる気がしてくる。

実は今これが夢で海の中に入れば夢から覚めることができる気がしてくる。

もちろんそんなことは不可能でこれが現実だということは自分が一番わかっていてるんだけど。

砂に足がとられるからサンダルを脱いで海へ向かった。  
岩の上をどんどん進んでいく。

滑ったら絶対怪我しちゃうよ。

一番端まで行って海を見てみると結構深かった。  
たぶん足はつかない。

もぐっちゃおうかな。

海の中がキラキラしててあまりにも綺麗だから。

こんなところで死ねるなら幸せだな。

今の私は命を大切にできない。

自分も周りの人も動物も植物も生きているもの全てを大切にできない。



私には生きる希望も生きる理由も生きる資格も全てがない。

底なし沼で私はどんどん自分が沈んでいくのを暴れもせずただ眺めているだけ。

気が付いたらもう体は半分落ちかかっていた。

「……うわっ！」

後ろから勢いよく引つ張られて尻もちをつく。

「じっ……ごめんなさい!!」

声が聞こえて振り向くと同年ぐらいの男の人が頭を下げてる

「えっ……だっ誰？なんで謝るの？なんでいるの？」

久しぶりに自分の大きい声を聞いて自分が一番びっくりした。

私の声を聞いて顔をあげたその人は短髪で日焼けをされていてどうみてもいい人って感じ

「いやっ……俺、ここの近くに住んでて、そんで海きたら、あっあなたがいて、えっと……そんで俺心配で……えっと……」

多分彼は私が心配でここまで来て落ちそうな私を助けてくれたんだ

ろう。

彼は全く悪くないのに焦ってどんどん汗をかきながら必死で言葉を探しているのがおかしくて

笑ったらあっちも顔がひきつりながらも笑った。

その時はもう何もかもがどうでもよくて笑いが止まらなくて、そして涙も止まらなくて

笑いながら泣くなんて器用なことがきんだなと冷静に考えてる自分もいた。

彼を失ってから初めて泣いた。

そしたらもう止まらなかった。

ずっと泣き続ける私を見て彼は困っている。

そりゃそうだよ、初めて会った子が笑ったと思ったら泣きだしただから。

「だっ・・・大丈夫？怪我でもしっ・・・わあっ！！！」

心配して立ち上がった彼がバランスを崩して海に落ちてしまった。

「だっ、大丈夫？誰か呼んでくる！」

「あー大丈夫です。俺よくここから飛び降りたりしてたからちよつとあっちで待っててください。」

器用に浮かびながら彼が指を指した先は近くの砂浜だった。

私は走ってそっちに行った。

行く途中焦って足を踏み外して岩と岩の間に落っこちたけど、そんなことよりも彼が心配で必死で戻った。

私がそこに着くのとほぼ同時に彼も着いた。

「大丈夫!？」

「大丈夫です。なんかもう俺かつこ悪すぎて・・・」

「ごめんなさい!私のせいで本当・・・」

「いや!全然平気・・・あつ、足から血がでてる!」

「あーさっき足踏み外しちゃって。」

「とりあえず一回水で洗わないと!」

「こんなの全然平気だから。」

結局彼は譲らず、私は近くの水道で洗った。

今彼は海水で濡れたTシャツを脱いで絞ってる。

びっくりした勢いで気が付いたらもう涙は止まってた。

「あの・・・」

気が付いたら彼は目の前にいた。

呼びかけても返事をしない私を心配した目で見る

「仕事・・・大丈夫ですか？」

「えっ、私大学生ですよ。」

「うそっ！何歳なんですか？」

「21歳です。」

「えっ、タメ！？」

「えっ、年下じゃないの！？」

とりあえず彼は私に対して敬語だったからやめてもらった。  
また会うかなんて分かんないけど。

「名前・・・何？」

「凜子。泉凜子。そっちは？」

「林田颯太。何て呼べばいい？」

「あー別に何でもいいよ。呼び捨てとかでもいいし。」

「じゃあ凜ちゃんで。」

彼はいつも甘えるときまって凜ちゃんと呼んだ。

全く違う人に呼ばただけでも動揺する自分。

黙ってる自分に心配する彼・・・颯太くん。

いいよつと言って笑うと颯太くんも安心したように笑った。

「私用事あるからもう行くね。よくここ来るからまた見かけたら声かけて!」

びつくりしてる颯太くんから逃げるように走って帰った。

電話番号の交換とかの話になる前に逃げた。

もう会いたくなかった。

颯太くんは優しすぎる。

きっと私はいつか信用して自分が不倫していたことを話すだろう。  
そして颯太くんは自分のことのように心配してくれるだろう。

そんな人はいない。

自分の罪を誰かと背負ってはいけない。

これは罰なのだから自分だけがうけなくちゃいけない。

家に帰って彼から連絡がくるかもと期待してる原因の携帯をお風呂  
の中に落した。

もう不要だから。

アドレス帳でしか繋がってない人たちは友達なんかじゃない。  
だからもうこの携帯の中に必要な人はいない。

本当は落とす時連絡が絶たれることを恐れて手が震えたけれど。

さよなら、さよなら、さよなら

心の中で何度も呟いた。  
呪文のように何度も何度も。

「さよなら、さよなら、さよなら。」

あふれる涙はもう止まらなくてひたすら泣きながら呟いた。

さよなら、さよなら、さよなら。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7109v/>

---

Hana

2011年10月9日13時51分発行